

しんぱん
しどうようもんしゅう
新版 指導要文集

だいにしょう
じっせん
第二章 実践

いちねん
ちから
一念の力

しゅじよう　こころ　汚

「衆生の心けがるれば土もけがれ、

こころきよ

心清ければ土も清

じようど

えど

ど　ふた

へだ

し」とて、浄土といい穢土というも、土に二つの隔てな

われ

こころ

ぜんあく

み

しゅじよう

し、ただ我らが心の善悪によると見えたり。衆生という

ほとけ

まよ

とき

しゅじよう

な

も仏というも、またかくのごとし。迷う時は衆生と名づ

さと

とき

ほとけ

な

け、悟る時をば仏と名づけたり。

いっしじようじようぶっしじよう

015 一生成仏抄

いちねん

ちから

一念の力

317 ページ 11 行

ひと

せいめい

にご

せいかつ

かんきよう

にご

ぎやく

ひと

人びとの生命が濁れば生活の環境も濁り、逆に人びとの

せいめい

きよ

せいかつ

かんきよう

きよ

じようど

生命が清らかであれば生活の環境も清らかになるのであつて浄土

こうふく

ほとけ

せかい

えど

なや

せかい

（幸福な仏の世界）といても穢土（悩みにみちた世界）といつて

べつべつ

す わたし

せいめい

も、別々にあるものではありません。ただそこに住む私たちの生命

き

と

しゅじょう

ほとけ

ちが

のよしあしによつて決まると説かれています。衆生と仏という違

おな

せいめい

じつそう

まよ

しゅじょう

いもこれと同じで、生命の実相に迷っているときを衆生といい、

さと

ほとけ

悟ったときを仏というのです。

いのち

いちねん

ほとけ

いちねんずいき

くどく

と

命すでに一念にすぎざれば、仏は一念随喜の功德と説き

たま

給えり。

(030 持妙法華問答抄

じみようほっけもんどうしよう

いちねん

ちから

一念の力

517ページー7行

かこ　　みらい　　げんざい　　みつ

過去と未来と現在とは三つなりといえども、一念の心中

いちねん　しんちゆう

むふんべつ

の理なれば無分別なり。

さんぜしよぶつそうかんもんきようそうはいりゆう

そうかんもんしyou

049 三世諸仏総勘文教相廃立（総勘文抄）

いちねん　ちから

一念の力 711 ページ 9 行

はちまんほうぞう

わ

しんちゆう

はら

たも

いだ

たも

この八万法蔵を我が心中に孕み持ち、懐き持ちたり。我

しんちゆう ところ

ほとけ

ほう

じようど

わ

み

ほか

が身中の心をもつて、仏と法と浄土とを我が身より外

おも ねが もと

まよ

い

ところ

ぜんあく

に思い願い求むるを迷いとは云うなり。この心が、善悪

えん

あ

ぜんあく

ほう

つく

い

の縁に値つて善悪の法をば造り出だせるなり。

さんぜしよぶつそうかんもんきようそうはいりゆう

そうかんもんしろう

（049 三世諸仏総勘文教相廃立（総勘文抄）

いちねん

ちから

一念の力 713 ページ 13 行

さつばしった　そおう　ゆみ　ひ　み　な　りき
「薩婆悉達の、祖王の弓を彎き満つるを名づけて力とな
し、七つの鉄鼓に中り、一つの鉄圀山を貫き、地を洞し
て水輪に徹るを名づけて用となすがごとし

049 三世諸仏總勘文教相廃立（總勘文抄）

一念の力 723 ページ 5 行

いわゆる、

南無妙法蓮華経は三世一念なり。

なんみようほうれんげきよう

さんぜいちねん

おんぎくでん

095 御義口伝

いちねん

ちから

一念の力

1096

ページー11行

いちねん おくごう しんろう

ほんらい むさ さんじんねんねん お

一念に億劫の辛勞を尽くせば、本来無作の三身念々に起るなり。いわゆる南無妙法蓮華経は精進行なり。

095 御義口伝

おんぎくでん

いちねん ちから
一念の力 1099 ページ 16 行

いちねん せいめい おくごう なが あいだ

たいへん しんろう

わが一念（生命）に億劫（長い間）にもわたる大變な辛勞を

つ ぶつどうしゆぎよう はげ

ほんらい じぶん み

尽くして仏道修行に励んでいくならば、本来、自分の身にそなわ

むささんじん ほとけ せいめい しゅんかんしゅんかん お

っている無作三身の仏の生命が、瞬間瞬間に起こってくるので

なんみようほうれんげきよう とな じたい

す。いわゆる南無妙法蓮華経と唱えていくことそれ自体が

しょうじんぎよう

精進行です。

か かんおう うたが だいじん しん た
彼の漢王も、疑わずして大臣のことばを信ぜしかば、立
なみ 凍 い いし や 立 ちち
つ波こおり行くぞかし。石に矢のたつ、これまた父の
敵 おも ししん ゆえ ぶつぽう
かたきと思ひし至信の故なり。いかにいわんや仏法におい
てをや。

405 日女御前御返事（御本尊相貌抄）
にちによごぜんごへんじ ごほんぞんそうみようしよう

いちねん ちから
一念の力 2088 ページ17行

かんおう こうぶてい しんか ことば うたが しん ゆえ
あの漢王（光武帝）も、臣下の言葉を疑わずに信じた故に、そ
なみ た すいめん こお いし
れまで波の立っていた水面がたちまちに凍っていったのです。石に
や た ちち しん りこう いちねん つよ ゆえ
矢が立ったのも、父のかたきと信じた李広の一念の強さ故です。ま

ぶつぽう

して、仏法においてはなおさらのこと、

しん

信ずる一念の強さが大切な

いちねん

つよ

たいせつ

のです。